

対談：山間に図書館をひらくこと

図書館という口実

古川 佳代子

6月末のある日、シンポジウムに先立って奈良県東吉野村の私設図書館ルチャ・リプロを訪ねた。ちいさな川に架かる古びた橋を渡り、木立を抜けた先に図書館はあった。すぐそばを県道が走っているにもかかわらず、閑かな佇まいのそれはたしかに“彼岸の図書館だ”と合点がいった。ここを訪う人は本を借りる、あるいは読むことよりも（そういう人もいるだろうけれど）、この場に漂う気と時間の中に身をおき、話し、聞き、沈黙し、再び此岸に生きる気力を回復させるために来るのだろう。この場の近くに住む人、この場を求めて辿りついた人は幸いだ。主はただ自分の好みの本を揃え、利用者が来ればよし、来なくてもまたよし、の構え。せっかくたくさん本があるのだから、ちょっとお裾分けしましょう、と開かれた図書館は、利用者数に振り回されることも、リクエストに応える義務も、ない。場を開き避難できる場を設けた、それで充分にコトをやり遂げているのだ。

シンポジウム登壇者の皆さんからは刺激的な言葉、多様な方向性、考察していきたい事例など、たくさんのことをいただいた。なかでも「生きものとしての幸福をはかる物差しを持って」という青木さんの言葉は、これだけでこの場に来た甲斐がある、と思える言葉だった。社会的地位や評価、商品としてどれだけのことが提供できるかなど、他者の目を通して自分の幸福度をはかることの危うさを、端的に指摘された。他者の物差しで示される自分の価値に翻弄され、生き延びることに精一杯な自分だけに留めず、友人や知人、この言葉を必要としている多くの人たちに届けていこうと思った。“山間に図書館を開く”ということは、たとえば、転機となる言葉や考え方と出会え

る場を整えること、少し歩みを止めて、来し方行く末を自分のペースで考える時間を提供すること、日々の営みの濁流から一時避難できる場所を作ること、かもしれない。

4年前から住みだしたT町は、山間にある人口3千人余りの小さな町で、買い物に出かければ必ず知り合いに出くわすし、コンビニに行っても銀行に行っても、今日はどこそこに出かけていたね、とわかってしまう。防犯面では非常に心強いが、反面、匿名性は担保されず、一人になれる場所を町内に見つけるのは難しい。そういうなかで図書館は、肩書きやしがらみからしばし離れて、素の自分になれる場所の一つかもしれない。図書館に行くのに特別な口実はいらぬ。図書館でなにをするのか、したいのかを、他者に説明する必要はない。滞在時間も過ごし方も、誰はばかることなく自分で決められる。漫画を2時間読み耽ろうが、新聞のテレビ欄だけを確かめて帰宅しようが、待ち合わせの場所にしようが、どのように使っても構わない。知り合いに会ってもそれなりに距離を保ってられる。こんなに使い勝手の良い公共の場所はそうそうない、と思うのだがまだまだコミュニティスペースとしての認知度は低く、本好きの人のための場所だと受け止めている人が多いようだ。このイメージをなんとか払拭したい。

“むらおさめ”という作野教授の考えに出会えたことも大きな収穫だった。高知県の山間地域はいずれも人口減少が加速しており、集落存続の臨界点に近づいている地域も少なくない。それにも関わらず、町や村は右肩上がりの活性化を掲げ、高知県独自の取り組みとして設けられた集落活動センターには、集落維持の仕組みづくりだけでなく、収益性も求められている。町村を維持するために移住促進に取り組むことや、特産品を活用した新商品の開発は大切な事業だと重々承知しており、否定するつもりはない。けれども一方で、集落の機能を失いつつある、あるいはすでに失ってしまった集落を放置してよいはずはない。「むらおさめ」とは「集落の小規模・高齢化により、集落機能が著しく低下ないしは消失し、当該集落の無住化が確実視される状況

において、行政機関や他地域住民が積極的に関わりを持ち、居住者のQOL(生活の質)を維持するとともに、無住化までに実施すべき集落保全活動を積極的に進めていく主体的行動¹と作野教授は定義されている。暮らしを守るのに精一杯な居住者だけに主体的行動を求めるのではなく、周辺地域住民や行政や福祉機関の人たちも同様に、主体的にかかわっていくことが重要だ。

ここ数年来、友人や連れ合い、自分の本などを利用してO村に“私設のちいさな本のある場所”を拓けないかと考えている。本や人と気軽に出会い、一人になることも可能な場所。語りたければ語り、静かに過ごしたければそれも許される場所。目的がなくても気おくれすることなく、ふらりと立ち寄れるコミュニティスペース。そんな場所を拓くことができれば、講演会や音楽会なども催したい。訪うのに理由の必要ない“本のある場所”は、むらおさめに寄りそう、ターミナルケアとしても機能するのではないか。場所の確保などクリアしなくてはいけないことはまだまだあるけれど、いつか必ず場所を拓きたい。いつか持てるだろう“あしたの図書館”のことを夜な夜な考えては、至福の時間をすごしている。

1 作野広和 (2010) 『『限界集落』の捉え方と『むらおさめ』に関する覚え書き』, 島根地理学会誌, 44, pp.15-27